



Title	杉本先生のご退職にあたって
Author(s)	上田, 功
Citation	大阪大学英米研究. 2014, 38, p. 11-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

杉本先生のご退職にあたって

上田 功

杉本孝司先生は2014年3月末をもって、定年により大阪大学をご退職になる。先生は1973年大阪外国語大学大学院修了と同時に同大学に助手として採用されて以来、41年の長きにわたって、大阪外大と統合後の大阪大学の外国語学部及び言語文化研究科で、行政、教育、研究のすべてにおいて大きな貢献をしてこられた。

まず学校運営では、大阪外大の学生部長そして副学長として、大学の法人化や大阪大学との統合に尽力され、統合後は大阪大学の外国語学部長、そして総長補佐を務められ、統合後の諸問題の解決に当たると共に、大学の語学教育拡充の一翼を担われ、大変なご苦労をされた。これについては、多くの者が知るところであるが、統合直後は、旧外大と旧阪大双方とも運営面での意見が異なり、旧外大からの「外大の方針を踏襲したい」、そして旧阪大側からの「大学全体の方針に従うべきである」という二つの主張の間で、ご苦労をされたとお聞きしている。私は旧外大の人間なので、前者の立場に身を置くことが多かったが、旧阪大の執行部近くの人からは、「必要以上に旧外大のやり方に固執すれば、他部局の反発を受け、将来外国語学部は埋没するだろう」と聞かされていた。要は、ほとんどの阪大スタッフ、特に理工学系、医学系では、統合について何も詳しいことは知らなかったというのが実情であった。先生はそのような困難の状況の中にあって、あの気さくで柔らかなコミュニケーションスタイルと、それでも主張すべきところははっきりと相手に聞いてもらうという姿勢で、粘り強く適切な着地点を模索され、他部局長の方々からの信頼を得て、ひとつひとつ問題を解決していかれたという。私の記憶に鮮明に残っているのは、非常勤の予算をめぐる出来事である。外大は、その性格上、非常に多額の非常勤予算を使っていた。統合にあたって、本省はそれを認めて、約2億円の非常勤予算を加えた額の運営交付金を阪大

に交付することになったのであるが、杉本先生は、年度進行での運営交付金削減に伴う経費節減を、阪大全体でおこなってゆく過程で、この非常勤予算が、将来必ず問題になるだろうと予想されて、外国語学部独自の削減案を準備しておられた。予想は的中し、統合4年目に、執行部から非常勤予算を3年かけてゼロにするとの提案が示された。この提案は大きな問題に発展したが、結局、突出した非常勤予算をどうするのかと迫る執行部が、最終的に矛を収めたのは、杉本先生が作っておかれた外国語学部の予算削減のプランを示したからであるという。

杉本先生はたぐいまれな教育者であった。博士論文はもちろんのこと、修論や卒論も隅から隅まで目を通され、そして試験やレポートまでも、求められれば、直ちに的確なコメントもできるほど丁寧に読まれた。41年間を通して授業の休講もほとんど無く、講義には、妥協せず長い時間をかけ、十分な準備をして臨まれた。先生はご専門だけではなく、英語の実習関係の授業でも、その教育能力を存分に発揮された。大学書林から出版された *English à la carte* という総合英語の教科書を見ると、学生の自主性を重んじる、幅広い授業スタイルのみならず、先生の驚くべき英語力と、英語の背景にある文化に対する該博な知識と深い理解が見て取れる。私はこのように真摯に英語教育に献身される先生の姿を見て、自分の至らなさをよく反省したものである。

私は先生に誘っていただき、高等学校の検定教科書の仕事を何年かご一緒させていただいた。当時英語IとIIと呼ばれていた、総合英語の教科書である。現在では、英語力の低下によって、英米で出版された原典を直接使用することは不可能とあってよい。勢い原典をリライトしたり、何かトピックを選んで書き下ろすことが求められる。この仕事で、私は杉本先生の恐るべき英語力、ことばに対する感受性、そして教育現場に対する現実的な見方を知ることとなった。先生がリライトしたものは、時には原典より格調高く、文は自由に踊り、やさしく高校生に語りかけながら、彼らを英語の世界に誘うものであった。完成した教科書は、文科省の検定を受け、検定官の長々とした意見が付いて、修正や返答を求められるが、ある時、虎ノ門の文科省で検

定意見を受けた先生は、大阪までの帰りの新幹線のなかで、ほとんどすべての意見が英語として間違っていることを指摘する反論を書き上げてしまわれた。検定官からの再反論はなく、教科書は検定に合格した。高等学校教科書の編集と執筆で、先生は教育者としての能力を遺憾なく発揮されたのである。

思えば私が研究者を目指そうとしたころから杉本先生は、いつもそこにおられた。1970年代の大阪外大の大学院は、日本の現代言語学のメッカのひとつであった。きっかけは林榮一先生と寺村秀夫先生の大学院の合同ゼミに、関西全域から言語学徒が集い、大きな研究集団となったことである。東京では大学間の垣根が高く、他大学の研究会に参加することは希であったようだが、関西はリベラルで、どの大学に属していても、教員でも院生でも、自由に行き来ができたのである。杉本先生はその黎明期のメンバーである。すでに学部時代から毎日のように、言語学の諸分野の読書会や研究会を開き、メンバーは、さながら新言語学という革命が起こり、新しい国造りに身を捧げるような情熱をもって研究に励んだという。大阪上本町のはずれにある、古くて狭い大阪外大の、うす汚れたビルの屋上に建てられたバラックにあった院生室が、日本の言語学を牽引する車輪となっていたのである。この集まりは、大阪外大言語学研究会から関西言語学会へと発展し、我が国の言語研究の発展に大いに貢献して現在に至っている。私が大学院に入った時には、創設期のメンバーはすでに他大学に職を得て、外大を離れてしまっていたが、杉本先生は大学院修了後すぐに母校に勤められたので、常に「そこ」におられたのである。

創生期のメンバーのなかでも、杉本先生は特に優れた研究者であったと聞き及ぶ。研究会の中心におられ、当時神戸大学教授であられた筧壽雄先生は私に、「逸材は大勢いたが、鋭さでは杉本君だ。」とおっしゃった。また当時日本人で世界で活躍する数少ない研究者であったハーバード大学の久野暉先生が、有名な著書のなかで杉本先生の論文を紹介しておられたし、南カリフォルニア大学の柴谷方良先生やMITで学位を取得された原口庄輔先生からは「杉本君はまだ外大にいるのか。」などと尋ねられたことがある。杉本

先生は、そのような世界的な研究者にも認知されていたのである。

もっとも杉本先生は、そのような評価はまったく気にかけずに、マイペースで着々とご自分の研究を進められた。私の記憶に残っているのは、学部のゼミで、例えば今年は多動性、今年はヴォイスというふうに、毎年違ったトピックを決めて、それを学生と共に勉強されるのだが、そのトピックに関しては、主要な先行研究はすべて網羅し、研究の state-of-the-art まで把握し、「これで〇〇については、だいたいわかった」と言われて、この『英米研究』に、その分野に関する論考を書かれるのである。先生の研究対象で、よく知られているのは、意味論、語用論に関する研究であるが、私にとって杉本先生は、言語学の神様であった。何でも、どの分野のことも知っておられるのである。実際私の専門分野である音韻論でも、大きく理論的枠組が変わるまでの、基底の抽象性や、音韻規則の適用順序等、様々な問題に精通しておられた。おそらく「ことば」という山に、音韻、統語、意味、語用というような、様々な登り口から登山をして、何度も頂上をきわめたので、おのずと言語の本質を見定められたのであろう。これは先生がハワイ大学に提出された学位論文のスタンスを見てもよくわかる。一段高いところに立って、形式意味論の長所を生成文法理論に取り込もうとされているのである。ところが最近は、前述したように、管理職に任ぜられた期間が長かったので、大学行政に時間を費やされることが多く、ご自身も研究時間の不足を嘆いておられた。ご退職後は研究に戻られることであろうが、私は、現在構築されている独自のメタファー理論がどのように発展するかを楽しみにしている。きっと認知言語学分野でのメタファー研究の大家、G. Lakoff も驚くような研究が発表されることであろうと、密かに期待しているのである。

上で触れた久野先生や柴谷先生が新言語学研究のパイオニアならば、杉本先生は第二世代といってよい。そして私はその次の世代である。先生の世代が頑張って、研究成果は世界に向けて発信せねばならないと身をもって示してくれたおかげで、われわれの世代も、海外の学会で発表したり、国際ジャーナルに投稿したり、外国で学位を取ったりすることが当たり前と考えるよ

うになり、日本の言語学研究は、国際的認知がますます進んでいる。その背中を見て歩んできた人間にとっては、お礼を申し上げねばならない。

このように杉本先生は、学校行政、教育、研究、すべての面で、大阪外大と阪大に大いなる貢献をしてこられた。研究一辺倒ではなく、誰よりも英語を愛し、並外れた語学力で外国語を専攻する者としての理想像を示す、まさに外大が理想とする教員であった。今、定年という如何ともしがたい制度により、先生をお送りせねばならない。もう毎週のように先生の屈託のないあの笑顔を見ることはできないのである。この何とも表現しがたい茫漠とした寂寥感、そしてこれまでのご貢献に対するお礼、無事ご定年を迎えられたお祝い、次の職場におけるご活躍の祈念、今後も変わらないご指導をたまわりたいという切なる願い、このような別離に伴う万感の想いをこめ、人口に膾炙する惜別の絶句一首をもって、この一文を締めくくる。

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る 李白

故人西のかた黄鶴楼を辞し 煙花 三月 揚州に下る
孤帆の遠影 碧空に尽き 唯だ見る 長江の天際に流るるを

(2014年1月)